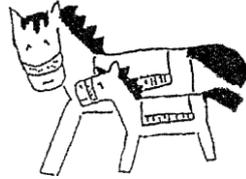


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと



22年 4月 NO. 185

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		4月の主な活動		～お気軽にどうぞ～	
4月 4日	日	救急救命講座 14:30～16:30		乳幼児の救急法やAED使用の 実技をします。	
4月 16日	金	おはなしの会 10:00～11:00		おもしろい紙芝居や手あそびもあるよ。	
4月 17日	土	体験保育 10:00～12:00		同じ年齢のクラスに入って あそびましょう。	
4月 17日	土	ヨーガで身も心も軽く 14:30～16:00		腰痛や肩こりが楽になりますので 続けましょう。(託児予約要)	
4月 22日	木	香川みずぶさんの会 14:00～16:00		子育て・孫育てについて フリートークをします。	
4月 23日	金	健康・育児相談 11:00～12:00		小児科園医師にゆっくり 相談できます。(予約要)	
4月 24日	土	体験保育 10:00～12:00		出産予定の方も子育て体験に おいで下さい。	
4月 24日	土	ヨーガで身も心も軽く 14:30～16:00		腰痛や肩こりが楽になりますので 続けましょう。(託児予約要)	
<ul style="list-style-type: none"> ・毎火曜日 園庭開放(13時～16時) ・上記の活動日以外は13時～18時まで地域開放しますので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み) 			育児相談(月～土) 9:00～18:00 しつけや子育てについての悩み、 保育園生活、入園・見学についての の相談もどうぞ。		

金子みずぶ全集5
さみしい王女・上より

ちんが、ちんが、ちんがらこ。

切れた草履が要るものか、
ぼんとほうって、ちんがらこ。

右に花摘み、左に花摘み、
切れた片かたしが邪魔になる。

みちの縁ふちにはげんげ草、
菜種もこぼれて咲いている。

飛ぶとき遠くの川瀬がみえた、
あっちのあぜの、豆の花みえた。
麦も飛ぶたび飛ぶような。

切れた草履を手に提さげて、
麦の中みちちんがらこ。



ニュージーランドでの子育て そのII

人口430万人の農業国 ニュージーランドでの出生率は2.17（日本は1.32）で妊娠期から家族を支え、幼児教育に力を入れており、出生率は上昇傾向にあります。

3月から5月まで3回にわたり、ニュージーランドの子育て事情についてご紹介します。

★ ニュージーランドの幼児教育

1889年に市民の寄付で無料の幼稚園ができたのが始まり。4歳児は午前授業、3歳児は週3回午後授業が多く、プレイセンターも午前中のみ。どちらも教育省から補助金が出る。幼稚園は3、4歳児の保育料を週20時間分補助されるため、利用者負担はほぼ無料。プレイセンターも無料の場合から最大でも1学期（10週間）50ニュージーランドドル（約3千円）程度。5歳の誕生日の翌日から小学校へ入学する。

★ ニュージーランドの教育指針

「子どもは遊びや生活の中で学んでいる」という考え方が幼児教育の主流で教育指針（テ・ファリキ（第二公用語のマオリ語で織物の意味）は、1996年に作られ、昨年全幼児教育・保育施設で義務化された。「学びの物語（ラーニング・ストーリー）」はその具体的実践手法の1つで、全員が課題に取り組む一斉保育はないが、自由な遊びの中に、保育者の専門性に支えられた学びがある、と考える。

★ 「学びの物語」の実践事例

ニュージーランドの首都ウェリントンにあるサンシャイン幼稚園で飼っている鳥のカナリアはひとりぼっちだった。「僕が友だちになってあげよう」と4歳の男児。「でもあなたはカゴに入れられないわね」と保育者。すると1人の男児が「もう一羽買えばいいじゃない」。そんなやりとりから、4歳児クラスの「学びの物語（ラーニング・ストーリー）」は始まった。

4歳児たちはカナリアを買うために手作りケーキを売って資金稼ぎすることになった。何人かはケーキの作り方を聞くため、母親に手紙を書いた。保育者の手助けで、絵も描きながら懸命に文字をつづることを通し、字を書き、表現する意欲が培われた。

親子で材料の買い物をした家庭は、数字を学ぶ動機づけになった。数人の親が幼稚園に来て、子どもたちと一緒にケーキ作りを手伝った。それをお迎えの親たちに売り、3週間後、カナリアは新しい友を迎えることができた。一連の出来事と、子どもたちが学んでいく過程の物語は、写真や文章にまとめられ、壁にはってある。

子ども一人ひとりの「学びの物語」のファイルもある。親はいつでも見て子どもの成長を知ることができ、持ち帰って家での様子も記入できる。これは活動記録ではなく、教育内容を評価する手法だ。

「文字や数字を教えるのではなく、好奇心を持つこと、できるという自信を持つこと、そこに至るプロセスが大事」と主任教諭。「家庭との連携が欠かせず、『学びの物語』は連携のよいきっかけになる」と話す。

「学びの物語」は各地で研究、実践され、04年から今年にかけ、教育省は全20巻の事例集を出した。



★ 親子が共に育つ場

「朝から晩までただ疲れる毎日。ここでエネルギーを発散してくれて助かる」。国内最大の都市オークランドで、運動を通じた親子関係作りに取り組む「ジャンピング・ビーンズ」教室に、2歳のやんちゃ息子と一緒に参加したケイト・トレバーバーンストンさんはため息をつく。

教室では1時間、専用に開発されたはしごやブランコといった遊具で親子で遊ぶ。世界幼児教育機構オークランド支部長でもある主宰者ソフィー・フォスターさんは「今の乳幼児はテレビや室内にこもってばかりで外遊びが足りない。運動と親子のふれあいが脳を発達させる」と言う。

もともとバイオリン教師だったが、2歳から無理に習わせる親と嫌がる子どもの姿を見て、音楽以前の親子関係ができていないことに気づき、98年に事業を始めた。

「親子が運動を通して自信を持つことが大切。親同士の交流の場にもなっている」という。

親と子が共に育つ場は古くからある。1940年代に母親同士がボランティアで始めた「プレイセンター」は、毎日の責任当番を決めて親が交代で保育にあたる。当番でない日は趣味やパートの仕事もできるし、親子一緒にセンターで過ごすこともできる。幼稚園、保育園と並ぶ保育施設なので、国の教育指針「テ・ファリキ」を実践し、国の補助金と寄付などで運営している。

ウェリントン郊外のパレマタ・プレイセンターには、0歳から就学前の25人が通う。3歳と1歳の息子がいるアン・ボローさん(34)は1年半前、長男の子育て支援プログラムを受けてから通い始めた。「子育てに自らかかわりたいので幼稚園でなくここを選んだ」という。「息子がほかの子をたたいた時期があったが、協調性がついた」

親の運営とはいえ、保育計画も会議もあり、「学びの物語」係がいる。親が実践の中で学ぶ保育者養成コースもある。わが子やほかの子がどう過ごし、何を学んだか、日々の保育を通して、親自身も育っていく。

抱っこ派

あなたはどっち?

おんぶ派



我が子をおんぶし、背中越しに語りかける—そんな昔ながらの風景は街中で見られなくなっている。一方で、子どもと対面する形の“抱っこ派”が増加。おんぶと抱っこをめぐる今どきの子育て事情を探った。

ベビースリング販売「北極しろくま堂」(静岡市)の社長で、抱っこやおんぶの文化史を研究する園田正世さんによると、抱っこひもは1980年代、急速に普及した。そのきっかけは「山口百恵さんの出産直後の報道で、抱っこひもでわが子を抱く姿を見た母親たちの間で瞬く間に広まったと、老舗の子守帯メーカーから聞いている」。

抱っこ派の優勢は数字でも明らかだ。ベビー用品大手の「コンビ」(東京都台東区)が去年夏、全国の母親を対象に行った調査では、おんぶひもの所有率は約3割で、抱っこ機能を主とした子守帯は約8割にのぼった。「近所の買い物」「公共交通機関を利用した長距離の移動」など屋外活動で抱っこを選択する母親が多く、逆に「家事」では、両手が空いて作業がしやすいおんぶが抱っこの3倍になった。

抱っこ

体調急変を察知 危険からの回避も

「女性の社会進出が増え、母親たちも積極的に外に出ようとしている。その流れで抱っこが中心になった」と分析するが、おんぶに「家内限定」傾向が強まっているのは、その見栄えの悪さもあるようだ。

胸元でクロスさせ。胸の形が強調されるおんぶひものデザインが敬遠される原因。

「40年前までは母親は人前でも臆することなく母乳をあげていて、胸を気にする風潮はなかった。最近では、乳児がいる母親が自分の胸を意識するようになった。」

さらに、凶悪犯罪の増加などで治安への不安感が増し、子どもが視界に入らないおんぶをあえて避ける母親も多い。東京都八王子市の主婦(42)は「子ども2人とも抱っこ。顔色の急変などに対応でき、歩きたばこなどの被害や見知らぬ人の攻撃を避けるため」と語る。わが子の顔が見えて、細かな健康管理ができ、一体感も味わえる抱っこのメリットは大きいようだ。

おんぶ

家事しやすい 親と同じ目線が脳に刺激

「親と対面する形の抱っこと違って、おんぶは親と同じ目線になり、親子で同じ世界を共有することで脳が発達し、価値観形成の基礎になる」と強調するのは、札幌国際大学の平野良明教授(幼児教育)。埼玉県和光市の主婦(25)も「断然おんぶ派。赤ちゃんが景色を見渡すことができ、脳によいと思う」と話す。

一方で、抱っこやおんぶの仕方が分からないという親も増えている。そんな人の要望を受け、スキンシップ講座を開くNPO設立をすすめる園田さんは「核家族化や情報過多で、子どもとの接し方が分からず、混乱し不安に陥っている親も多い。周囲で温かく見守ってやって」と求めている。